

脳を育てる動物飼育

Caring for animal may stimulate brain development

唐木 英明

(東京大学名誉教授・日本学会議会員)

< 困った親たち >

生活に困っているわけでもないのに給食費や保育料を払わない。最近はそのような社会的常識がない親が増えているようだ。小学校の教員が子供を叱ると、叱った理由は聞かずに、「うちの大事な子供を叱るな」と文句を言う。授業参観に来るように依頼したところ、「勤務を休んでいくのだから日当を出せ」という要求を受ける。「大事な子供に掃除なんかさせるな」、「記念写真を撮るときには自分の子供を真ん中にしろ」など、とんでもない要求が続く。これを拒否すると、「担任を変えろ」と校長や教育委員会にねじ込む。そんな話は、枚挙に暇がない。

親なら誰でも自分の子供は特別に可愛いし、自分の子供はとくに大事に扱って欲しいと思う。しかし、他の子供のことも考えて、社会的常識の範囲内で行動するのが当たり前であり、自分の子供だけ特別扱いを要求するのは親のわがままに過ぎないことは、普通の人間なら誰でも分かっている。ところが、ほんの一部とはいえ、そのような社会的常識がない親が社会を騒がせている。そんな親に育てられた子供たちがどのような大人に育つのか、考えると恐ろしい。

< 本能と理性 >

誰でも持つ本能の脳は「自分が生き残るための脳」であり、そのために「自分だけよければいい」という利己的な行動をさせる。自分の命を守るため、あるいは欲しいものを手に入れるために、ときには暴力を振るう。そして男性ホルモンは暴力傾向を強くする。また、感情を持ち、競争心や闘争心や向上心を持つのも本能の脳があるからである。この脳がないと生きてゆけないので、生まれたときにはすでにこの脳は働いている。生まれたての子供が大声で泣くことで空腹や苦痛を訴えるのは、この脳の働きである。

人間はもう一つの脳を持っている。それが理性の脳であり、社会の中で生きていくための脳である。他人の痛みを感じて、自分の欲望を抑えなければ社会は成立しない。そして、それを行うのが理性の脳であり、思いやり、やさしさ、道徳や倫理の脳である。理性の脳は、生まれたときには白いノートで、何も書かれていない。長い時間をかけて経験を積み、教育を受けて、このノートに思い出と教訓が書き込まれ、適切な判断力すなわち社会的常識を養っていく。生まれたての子供は本能でしか行動しないが、成長するにつれて他人の心が分かるようになり、本能すなわちわがままを抑えられるようになる。

人間は2つの脳を持っているが、本能の脳さえあれば生きて行ける。実際に、爬虫類や両生類などの脳の大部分は本能の脳であり、だからこれらの動物は恐怖と快楽だけで動かされる本能的な行動しかできない。理性の脳は、必要な場面で本能の脳を抑制する判断をする働きをし、欲求

不満のストレスを生む脳でもある。人間の行動を観察すると、その判断や行動の大部分が情緒的あるいは前例に従った経験的のものであり、わずかな部分が論理的・理性的なものである。しかし、わずかであっても理性的な部分があることが人間の間たる所以といえる。

このように、人間にとってどちらの脳も大事であるが、最も重要なことは二つの脳のバランスである。本能の脳は勝手に育ってゆくが、理性の脳は意識して育てる必要がある。理性の脳が未発達で、必要なときに本能を抑制できない人間は、反社会的な行動に走ってしまう。他方、理性の脳が強すぎて本能を抑えすぎると、ストレスが溜まって、うつになったり突然切れたりする。二つの脳のバランスのと리카たを学ぶことが、生きる力を養うことである。

こうしてみると、社会的常識がない親は、「自分の子供しか目に入らない」という、きわめて本能的、情緒的な行動をしている。ということは、本能を抑制すべき理性の脳が十分に発達していないのである。もちろん、これは「頭がいい、悪い」という記憶や経験の問題ではない。記憶や経験を基にして、社会的に正しい判断をする力が付いていないのである。だから、せっかくの記憶や経験を、自分の本能的な要求の達成のためだけに使い、それが社会的常識に反することには思い至らないのである。

これは、「他人の心や、他人の痛みが分からない」と言い換えることもできるだろう。そんな人間は、昔もいなかったわけではない。しかし、そんな人間は大家族の中で年寄りや周囲の人から厳しくたしなめられ、態度を改めなければ相手にされなくなった。社会全体が社会常識を守る努力をしていたともいえる。ところが、最近の個人主義の風潮の中で、個人主義と利己主義が取り違えられているような気がする。個人の人格の独自性と自律を重んじる「個人主義」やプライバシーの尊重は大事だが、これは他人の痛みを感じない「利己主義」とは全く違う。その違いを認識するのが理性である。それでは理性の脳を育てるにはどうしたらいいのだろうか。

< 理性の脳を育てる >

人間は 15 万年前にアフリカで誕生し、狩猟採集生活を続ける中で、子供たちの理性の脳を立派に育ててきた。教育と、豊かな経験のなかで社会的な判断力を身につけさせたのである。

教育とは教科書を勉強することではない。第 1 に、大人の行動を真似ることである。子供は物まねの天才であり、そうやって理性の脳が育っていく。いい手本は理性を育てるが、悪い手本は理性を損なうことは言うまでもない。第 2 に、悪いことをしたら怒られ、いいことをしたらほめられる。そうして善悪の判断を身につけていく。そんな簡単な方法である。

豊かな経験とは、喜びと悲しみ、出会いと別れ、誕生と死など、感情を動かされる多くの出来事との出会いである。とくに、自分より小さな子供など、小さくて弱い相手に愛情を感じ、自分が守り、助けることの喜びを味わうことはとても大事なことである。

小さくて可愛い動物とふれあい、その温かさ、やわらかさ、心臓の鼓動を感じ、心を通わせる経験は子供たちにとって忘れられない思い出になり、その中から豊かな感性と知識を得るだけでなく、適切な判断力を身につけること、すなわち理性の脳の発達を助けることが期待されるのである。